様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 ３１ 日現在

機関番号：１２６０８
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０８０４

研究課題名（和文）三大改革再定義

研究課題名（英文）The economic policy during Edo period

研究代表者
山室　恭子（YAMAMURO, Kyoko）

東京工業大学・社会理工学研究科・教授

研究者番号：００１５８２３９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,000,000円、（間接経費）　　1,200,000円

研究成果の概要（和文）：　江戸幕府の三大改革についてミクロ経済学の見地から新解釈を加え、また貨幣改鋳の目的についても通説とは異なる知見を提示して、江戸幕府の経済政策について新たな見通しを導いた。公儀・武家・商人の三者のゲーム的状況としてとらえたところが特徴である。
　さらに江戸の商人集団の特性というテーマへと展開し、商人たちが株の譲渡や売買をめぐって、どのように行動したかを観察することで、商人集団の知られざる行動原理にアプローチした。

研究成果の概要（英文）：The Edo period was a time of persistent economic development spanning around 260 years. In addition, it signaled the beginning of the Long Wave of Modernization. We use a new data set to show how long the Edo merchants survive and where to locate the business objective for survival. We found that the number of years of business survival of the Edo merchants was around 15 years on average.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学,日本史

キーワード：幕府　貨幣改鋳　江戸商人

１．研究開始当初の背景

江戸の幕政改革について、個別の改革についての細かな研究蓄積が厚みを増すいっぽうで、視点をいったん引き、3 つの改革すべてを視野におさめてみようという統合の試みは為されないままであった。寛政･天保における個々の施政担当者たちは、それぞれ 1 つ前の改革を強く意識して政策を決定していたのに、研究者の視野のほうが彼らよりむしろ狭くなってしまっているのが本研究課題開始当初の状況であった。

また、幕府の政策に数理解析的視点を持ち込む研究はさらに手薄で、財政や貨幣発行についてデータをもとに説得的な分析を展開した研究は皆無であった。

２．研究の目的

上記の現状を変え、幕政を貫く時間軸に沿って 3 つの改革を位置づけ、それぞれの達成点と次期へ引き継がれた課題を明確に見取り図化する。とりわけなぜその時期にそれぞれの改革がおこなわれたのか、という「周期性」が解明できれば、偶発的な政変の連なりではなく、経済的な必然性に起因するメカニカルなサイクルとして幕政の推移をとらえる道が開けることとなる。

周期性の解明にはミクロ経済学の視点を導入する。改革期に頻々と発令された武家保護令はイコール商人抑圧を意味するのであろうか。たとえば旗本･御家人の借金を棒引きにした寛政の棄捐令は、果たして通説の言う通り、札差ら商人にとって無法極まる大弾圧だったのであろうか。寛政元年 9 月 17 日、棄捐令の発布直後に松平定信は「御旗本等勝手向潤ひ候道は、おのつから町方之潤ニも候得は」――武家の勝手向きが潤えば、自然と町方の利潤も増えると勘定奉行に対して述べている（「水野家文書撰要類集」）。江戸の町の半分を占める武家人口の購買力が低下すれば、マーケットを失って商人たちも困る。こうした武家･商人双方の手詰まり状況を解消するために公儀が登場し、商人側に退蔵されている金銀を直接･間接に吸い上げて武家の財力を再充填し、市場の機能を回復させる、というのが三大改革の果たした最も重要な使命だったのではあるまいか。

以上、三大改革をまとめて視野に入れること、公儀･武家･商人の三者をまとめて視野に入れることの 2 つの「視点の引き」によって江戸の政治経済構造の理解に大きな前進をもたらすことを目ざした。

３．研究の方法

（１）　史料群 A の定性分析　政策決定プロセスの精査を中心に

『日本財政経済史料』全 20 巻のうち「財政之部」「経済之部」掲載の全史料群、そして『東京市史稿』のうち産業篇を中心に享保･寛政の両改革期（天保期は未完）掲載の全史料群を通覧し、論点構築に必要な史料を抽出・精読し、概要と留意点を整理した。

この探査で判明したのは、A群のうちでも、とりわけ政策決定に至るプロセスを伺いうる行政内部史料が、本研究にとって有益な情報を豊富に提供してくれることである。享保改革期であれば「享保撰要類集」、寛政改革期は「水野家文書」および「町会所一件書留」、天保改革期では向山誠齋の遺した浩瀚な記録がそれにあたる。改革を主導したリーダー、それを支えた奉行ら政策立案集団、外部からのアドヴァイザーとしての町年寄といった立場を異にする者たちのコラボレーションとして一つの政策が組み上げられていくプロセスが、日々やりとりされた文書類の読み解きによって、リアルタイムで浮かび上がってくる。

よって、これらをメインに、さらに内閣文庫や国会図書館所蔵の史料群のなかからも三大改革期の行政内部史料に焦点をしぼって抽出し、読解および分析をおこなった。

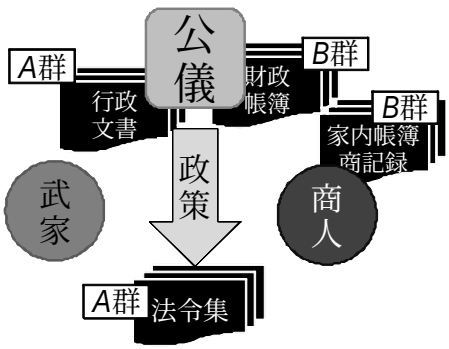
（２）　史料群Ｂの定量分析　グラフ化＝可

視化による土台づくり

2008 年に刊行された大野瑞男氏の『江戸幕府財政史料集成』上・下巻は、当該分野の研究を牽引してこられた氏の史料探索の成果を集大成した入魂の力作である。まずは、ここに掲載された幕府の各帳簿類の数値を Excel に入力し、それをグラフ化することで、数字を〈可視化〉してみる。

たとえば、非常によく利用される「御年貢金其外諸向納渡書付」での 1722-1836 の幕府財政の収支をグラフ化すると、前半の宝暦頃は 200 万両前後の低水準なのに収入が支出を大きく上回り、ラストの文政頃は逆に 500 万両に達する収入と支出がピタリと年ごとに合致する。予算規模が大きくなれば収支は合わせにくいはずなのに全く逆の現象が出現している、なぜだろう？　と可視化によって新しい疑問を発見し、ふくらませてゆくといった手法である。

用いた資料群の位置づけは下記の図のようになる。

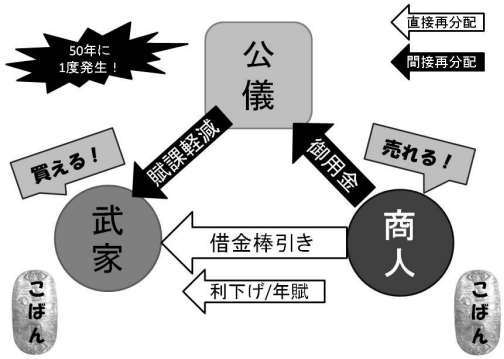


４．研究成果

（１）　定性分析によるもの

公儀の経済・財政政策の大きな流れが見えてきた。

たとえば 50 年に 1 度、借金棒引き令が公儀（幕府）によって発せられる。正当に結ばれた貸借契約の破棄を公権力が命ずるなんて、現代の感覚では暴政としか言いようがない。しかし一次史料を用いて解明したところによると、この借金棒引き令は下図のように富の再分配システムの一環として有効に機能し、当時の武家も商人もその必要性を認識して整然と公儀の指示に従っていたことが判明する。



あるいは 20 年に 1 度、貨幣が公儀によって改鋳される。古い貨幣は廃止されて、新しい貨幣に全面的に切り替えられる。そんなにころころ貨幣を取り替えるなんて、コストばかりかかる、はた迷惑な愚行にしか見えない。しかしこれも一次史料を精査すると、市場全体に大きな利益をもたらす有効な政策であったことが判明する。

このように現代から見れば理不尽な暴力や無定見な愚策としか見えないものが、当時にあっては、きちんと道理にかなった措置で、それぞれの社会集団の利得に合致するよう精妙に設計されていたことが、一次史料の解析によって分かってきた。

さらに、それらの清新な発見群をゲーム理論のフレームワークに乗せてみたところ、より鮮明に事象を把握できることが明らかになった。武家・商人といった各社会集団が、それぞれの利得を最大化するべく行動する時、どのような規範や制度が生成され、それがどんな困難に逢着して改良され洗練されていったのかを数理的に表現することで、江戸社会の動的な構造を解明する道が開けてきたのである。

上記が定性分析で得たおもな成果である。

（２）　定量分析によるもの

数値として把握できる貨幣・財政・物価の３分野について探求した。

① 貨幣

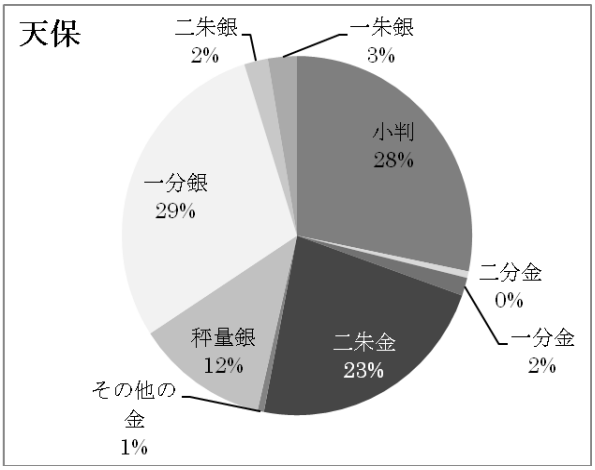
おもな情報源は『日本財政経済史料』全 20 巻である。

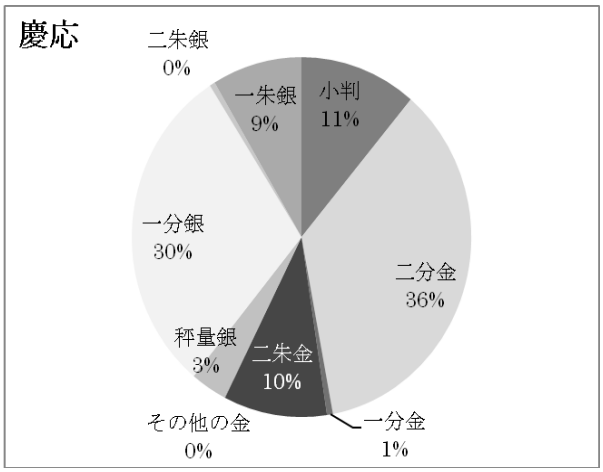
江戸時代を通じての貨幣発行高について、３つの時点における定点観測がおこなえることが判明した。元文元年(1736)、天保 14 年(1843)、慶応 2 年(1866)の３時点である。総額 17,412,120 両が鋳造された元文小判は、天保 14 年時点でまだ 4,977,277 両が、慶応 2 年になっても 4,686,445 両が未回収で世上に残っているというように、金と銀の各種貨幣のおおもとの発行高と、そのうち当該時点で世上に存在している額が詳細に記録されている。

これに基づくと、たとえば右図のようなグラフが得られる。天保から慶応へのわずか 23 年の間に小判（１両）が 28%から 11%へと大きく比重を下げ、二分金(0.5 両)・一分銀(0.25 両)・二朱金(0.125 両)のような小額貨幣が主流となり、そのなかでもどの通貨がメインとなるか、めまぐるしく変遷するようすが見てとれる。

さらに全流通貨幣のなかで、「古金銀」すなわち有効期限切れとなった旧通貨が占める割合を算出してみると、元文 37%、天保 30%、慶応 32%と、じつに３割超もの古金銀がつねに退蔵状態にあるという、ゆゆしき事態を発見する。

これが公儀が立ち向かわなければならない難局であった。敵はマーシャルのｋ。貨幣の発行高を増やすことよりも、商人たちが貨幣を抱えこまないように対策し、貨幣の回転を良くすることのほうが公儀の重要な使命だったのである。とすると、先の円グラフで小額貨幣化が進行していたのは、小判よりも小額貨幣のほうが退蔵されにくいという性質を利用した退蔵防止策だったと分かる。で





は、どの程度の金銀をどの額面に振り向けるか。どれくらい退蔵が進行したら新貨幣への切り替えに踏み切って旧貨幣の放出を促すべきか。これらの問いに対しては、複数の主体間での資源配分をめぐる交渉を扱う非協力ゲーム・協力ゲーム、そして時間軸での推移をモデル化して数理的に解く繰り返しゲームなど多方面でのゲーム理論の力が発揮できる。

商人のジレンマ 利得表

２枚とも流通		１枚は保有		
人数	１人あたり利得	人数	１人あたり利得	全体の利得
10	2.0	0	―	20.0
9	1.9	1	2.4	19.5
8	1.8	2	2.3	19.0
7	1.7	3	2.2	18.5
6	1.6	4	2.1	18.0
5	1.5	5	2.0	17.5
4	1.4	6	1.9	17.0
3	1.3	7	1.8	16.5
2	1.2	8	1.7	16.0
1	1.1	9	1.6	15.5
0	―	10	1.5	15.0

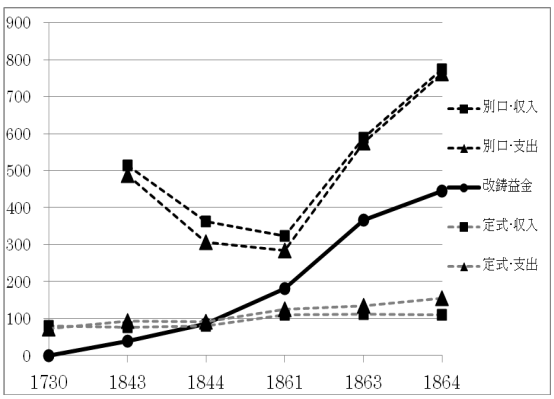
たとえば流通：保有が9人:1人の時、1人が保有に変えると8人が2枚流通となるから、彼の利得は1.9から 2.3 に増える。他の場合も同様である。

上図のように、ゲーム理論が対応できる形へと貨幣流通のメカニズムをモデル化することができた。

② 財政

当該分野の第一人者による集大成『江戸幕府財政史料集成』(2008)を活用した。複雑に入り組んでいる各種帳簿類の関係を吟味しつつ、数値をデータベース化する作業を実施した。

いくつものファインディングスがあったが、一例だけ提示すると、公儀の収支の細目が分かる帳簿全６冊について、定常収支と臨時収支の二本立てでグラフ化したのが下図である。定式（＝定常収支、グラフの薄い線）・別口（＝臨時収支、グラフの濃い線）ともに各年の収入■と支出▲はほぼきれいに一致して大赤字にも大黒字にもなっていない。これだけ会計規模膨張の激しい時期に魔法のようだ。魔法の出所は改鋳益金（●）である。将軍が上洛したり大砲を購入したりと出費が嵩むと、その臨時支出の分だけ、きっちりと改鋳益金から補填されている。グラフ化することで、あからさまな会計操作のあとが発見できる。



③ 物価

江戸時代さいごの３年間にあたる慶応元年(1865)から同３年にかけて、米穀の値段に不思議な事象が起きていることを発見した。大豆・油・綿など諸物価の高騰が 3-4 倍程度であるのに対し、米価だけは２年間で 10 倍という突出した高騰ぶりを呈している。

この現象を分析することで、米という財でも貨幣でもある両義的存在を江戸の経済制度が備えていたことが、幕府の命脈が尽きる最期の瞬間に思わぬ効果を発揮し、幕末の経済は大きな混乱なく明治へ移行することができたという結論を導いた。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

① 山室恭子・李昌玟、幕末における米価の暴落と暴騰に関する考察、日本文化研究、査読有、49、2014 年、221－237

② Lee Changmin and Kyoko Yamamuro, Cession, Succession and Business Continuation of Edo Merchants, *Department of Social Engineering, TITECH Discussion Paper Series,* 査読無,No.2013-12, 2013 年,1-15,http://www.soc.titech.ac.jp/info/docs/dp2013-12.pdf

③ 山室恭子、お江戸の富の再分配、日本歴史、査読有、763 号、2011 年、36-53

〔学会発表〕（計０件）

〔図書〕（計１件）

山室恭子、江戸の小判ゲーム、講談社現代新書、2013 年、191pp

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者
山室 恭子　（YAMAMURO Kyoko）
東京工業大学・大学院社会理工学研究科・
教授
研究者番号：00158239

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：